

スペイン古文書

マルセーロ・デ・リバデネイラの報告記録（第五卷の一）

佐久間 正 訳

第五卷

日本の恵まれた二十六人の殉教者の輝ける勝利と殉教に関して。

第一章 祝福された殉教者たちが死の前兆を知って、殉教のために如何なる準備をしていたか。

聖殉教者たちの非難者——キリシタンの堅固（な信仰）——聖殉教者たちの懇願——聖殉教者たちが信者に対して殉教を勧告した——聖殉教者レオンの神のような努力——日本人殉教者の性格——或る人々の意見に対する弁駁。

国王の家来・法眼（長谷川宗仁）は修道士を、キリシタンを作ったという理由で再び訴追しており、彼の息子ナゼイは船の財物を没収したときに修道士を中傷し、「彼等は父の言葉を信じないで（却って）父の忠告に逆ってキリシタンを作っていた」と国王に告げたのであるが、悪魔はこの父子を修道士に対する迫害の手段とした。それで国王は、修道

士に対して憤る素地が充分出来ていたので、彼等を欺瞞者・狡猾者と称びまた彼等のことを語るときに著しく不気嫌であった。これを見て右兵衛という法眼の息子は国王に提出するため、都で発見された全キリシタンの名を覚書に記録し、国王はキリシタンの敵である国王の侍医ヤクイン〔Iacyn. 施薬院?〕が彼〔国王〕に勧告していたように、「キリシタンを悉く殺せ」と命令した。しかし都の奉行・オイモノゴはキリシタン〔註・a〕に関して作られた処置と詳細を知ったが、その第一にジュストと称する——彼の徳と信仰に関しては既に述べられている——身分の高いキリシタンの名が載っているのを見て、それは自分の責任であるので文書を持って来た者に、「あのキリシタンはすでに処罰されている。この問題に関してはこれ以上何も取り上げるな」といった。そしてこの奉行は後に聖殉教者の数を決めた者であるが、すでに名前の載っているあの多人数、「私たちは主の教えと主のために死ぬのを希望しています」といながら公に自分〔の名〕を表明しているこれほどの多数の人々を殺すまいとして右の「言葉」をいったのである。

こうしたいきさつや祝福された殉教者たちに届いた報告から生じた他の色々な兆しは極めて嬉しいものであった。何故ならば自分たちの説いてきた教えのために死ぬことほど望み且つ期待していたことはなかったからである。殉教者たちが全キリシタンに示した勇氣と力は実に偉大なものであった。師と共に死ぬことを望む殉教者は、大人も子供も力強い熱誠を示し、みな清らかに十字架にかかるため白装束と麻の下袴カルソーキヌを用意した。こうしてこの機会に男も女も雄々しい努力を示した。聖遣外管区長はこれらの男女を絶えず励まし元気づけみなは愛する友・病院の憐れな癩患者たちを力づけた。そういう人々はそれまで自分たちにとっては師でもあり両親でもあった聖殉教者から取り残されて孤児とならないために進んで死を希望した。彼等〔殉教者〕は、牢に在るのが長くはなく、監視がつけられないでも殺されるに違いないことを知っていたので、聖修鍊に励み、清新な精神と熱誠によって毎日特別な祈禱を行なった。彼等は自分たちの上に主の御心が加わるよう主に願ひながら連ソニエ禱やその他の祈禱を行なった。そして彼等は血を以

って信仰を固めたとしても、自らの靈の中に特別の恩寵・恵みを受けるであらう。即ち主は彼等の聖なる願望に応えるように決め給うたので、彼等の抱いていた願ひについては心中に大きな慰めを与え、彼等が「精神的な支柱として」生きて来た諸々の期待に対しては大いなる確実性を与え給うた。

司祭たちは毎日「これが最後のものになるに違いない」と思いながら極めて偉大な精神と熱誠を以ってミサを唱じた。レーゴ修道士たちは二日毎に聖体拝領をした。彼等は信仰という楯で身を守り聖なるパンを食べて力づけられていたので、行く手に待っている労苦に対しては非常に力強かった。そしてこの事実は異教徒たちが捕えに来た時に示された。彼等はこの主の秘蹟の鼓舞によって非常に力づけられていたので、火を吐く獅子のように一切の肉體的な恐怖を捨てて、悪魔に對し戦いを挑んだ。そして主の愛に對する信仰の弱い者の心に火を点じ、殉教に加わることを望んでいる日本人の心には主の愛を一段と増すように努め、且つ殉教の光榮なること、殉教が極めて主の御心に叶う犠牲であること、或いはまた正しいと思う信仰のために死ぬ義務のあることを説明し、絶えず説教をして彼等を慰めた。また「人々の罪のために天主が十字架の上で生命を捧げたことを感謝してイエズスのために死ぬのは極めて価値のあることであるから、天国で受けるに違いない恩賞は非常に大きなものであらう」ともいった。聖殉教者のレオンやパブロの家を異教徒やキリシタンに説教する宿として用い、一年中の毎金曜日に数多のキリシタンがそこに集まる習慣になっていた。そして四旬節の中で天主堂へ行かない日にはそこで苦行を行なった。そして主に関する事柄に通じている一人の古くからのキリシタンが、この機会に我等の主イエズスの受難に関する玄義について説いた。何故ならみな殉教者となることを希望し、この祈禱の場に集まっていたからである。

そして熱烈な殉教者レオンはみなを力づけ、偉大な精神を以って「私はイエズスの御名において都の街路を曳きずり回わされることを望んでいる」と繰り返し繰り返し述べた。こうして彼があれほど希望していたことの前の夜にな

だったので、主がその愛のため受難する者に与えようと保蔵して、給う諸々の幸わせを、飽くことなく他のキリシタンに説いた彼「レオン」の熱誠は口ではいい表わせないほどであった。そして彼は、イエズスの兵士として（自分の望んでいるように）死ぬことは出来ないのだ、と想像するだけで苦痛を感じるほどの精神を示した。彼と同じ精神と希望をもっている他のキリシタンたちも同じ努力をし、聖修道士たちが捕縛されたのを知って主のため彼等と共に死のうとしてやって来た村々の多数のキリシタンを力づけた。しかし迫害は、使徒として臆することなく福音を説いた修道士たち及び少人数のその家族（彼等と共に天主堂で生活していた人々）に対してのみ行なわれた。この人々は家柄や金銀の財宝に恵まれている訳でもなく、有利な名誉或いは他の人々より秀れた生まれながらの才能や能力に恵まれている訳でもないのだが、主は殉教という光栄ある目的のために彼等を選び給うたのである。そして主は、かくも素晴らしい光栄を受けるように前もって定められていた人々に、主に仕えるための祈禱・謙虚及び苦行に関する方法を教えて天主の信仰と霊の光を知らしめ給うた。終に主は彼等に極めて大きな光栄を授け給うたので、聖福音のために十字架にかけられた彼等の足下には、現世の光栄が跪くこととなった。彼等はフランシスコ会士の最も光栄に輝く初穂を献納した殉教者即ちモロッコの光栄の五人の殉教者を模倣したのであるが、或る人々の考えているように無思慮な熱情で説教をしたのでもなく、或いは過度の熱情を以って福音を説いたのでもない。私が目で見た証人として前に述べたような方法で教えを説いたのである。また私の光栄の兄エル・マス、弟たちが、彼等の熱烈な兄エル・マス、弟である前述の諸殉教者や光栄にも殉教という光栄を得てセウタにあるその修道会にいい尽くせないほどの名誉をもたらし別の人々を模倣して、熱烈な精神の行動をしたのであるとしても、私は敢えて次のようにいいたい。或る殉教においてその熱熱な精神が讃えられているとするならば、その同じ理由で私の前述の兄エル・マス、弟たちの精神もまたその生前・死・死後、常に讃えられるべきである。

註 a Oimonogo. 右衛門尉〔増田長盛〕か？ アビラ・ヒロンによればキリシタン人名表を扱った者は治部少〔石田三成〕である。

b Ceuta. アフリカのスペイン領。一四一五年、ポルトガルが占領。一六四〇年スペインに割譲す。

第二章 都と大坂の天主堂において祝福の殉教者たちに如何に監視が付けられたか。

キリシタンの監視〔註・Vigilancia Cristiana. 意味不明確〕——天国「において見られるような」努力——天の精神——主の慰め——完全なキリシタンとしての徴し——大坂の天主堂に付けられた監視——パードレ・フライ・ジェロニモ・デ・ジェズース——御降誕の祝日の二日を祝ったこと。

幸運の殉教者たちが前に述べたような希望を抱いていたとき、総て予想していたことが起こった。即ち二・三日後に天主堂において彼等に監視が置かれた。そこには内にも外にも非常に多数の監視がいたので、聖殉教者たちが教館の内においてさえ何処へ行くにも監視がついて来た。これは彼等にとっては、すでに主のために受難が少しでも始まったのだと考えると、その精神的慰めは小さなものではなかった。そして聖遣外管区長は彼等の置かれている状態と抱いている慰めとを知らせるために、また真の教長として、そのとき都には居なかった部下たちを力づけようとし、我等の主イエズスの御為に少しでも苦難を味わうことを望むように励まして、聖マルティーンにこの手紙を書いた。その頃彼「マルティーン」も（都において知られていたように）すでに監視下に置かれ、死は確定的であるという徴候を見ながら苦難の盃を味わい始めていた。

聖遣外管区長から聖フライ・マルティーンに宛てた書簡

イエズスが台下の霊の中に在らんことを。最愛なる兄弟よ、台下からの手紙を受領し、御身に変わりのないこと及び主の愛のために苦難を受けるようクリシタンを力づけるため主が台下に勇気を与え賜うことを知って深く慰められました。主はここ「都」においても私たちに同じような御恵みを与え賜うています。主に祝福あれ。建物の内も外も監視に取り囲まれてはいますが、主の愛のために受難することを無上の御恵みであると考え、私たちは主とともに在って非常に楽しくあり慰められています。レオンは台下の手紙をもつては来ませんでした。彼の消息も解りません。昨日、堺の癩患者に託して台下の許へ手紙を送りましたが、その中で当地で起こったことについて知らせてあります。しかしそれが台下の手許に届かないかも知れませんから、その手紙に記されていることを簡単に述べましょう。台下がカヨに託してそちらの出来事を私に報告された日に、私たちは監視が付けられました。そして私たちの兄弟^{エルマー}コスメが「あなた方は後日必ず首を斬られることになっている」といいましたので、その夜私たちは準備を整え一晩中一睡もせずできる限りクリシタンの告解を聴き、私は夜の明ける一時間前にミサを唱じました。それを多数のクリシタンが聴きました。次に私たちのエルマーノ全員とその夜告解をしたその他の多数のクリシタンに聖体を授けました。そしてエルマーノ・フライ・ゴンサロに、「クリシタンに説教をして、退くことなくイエズスの御為に受難する用意をさせよ」と命じました。それに対して彼等は、この時期に際し一人残らず「私たちのために自らの生命を十字架上にかけて給うた主に捧げるため、百の生命が欲しい。また私たちの生命を捧げたいのだが、私たちは罪人であり主に対して私たちが今まで犯して来た数々の罪を償うために数多の生命を捧げても、なお償いには遠く及ばない」と答えました。

それからミサが済むと（彼等はみなそのミサに深い信心を捧げ、主が彼等に約束し給うと思われる御恵みに感謝し

て、涙を流しさえしました、そのすぐ後に役人の手下が大勢やつて来て、「教館の内のものは事務室にあるものも聖具室にあるものをも漏れなく見て歩きました。それから私たちを捕縛して連れて行くためにすでに鎖や綱をもって来ているというのを聞きました。やがて都の奉行が大勢の部下を従えてやってきました。そのときの私たちの心の喜びを誰が語り尽くせましょう。また主が私たちをその天国へ迎え給う時が到来したと思われるので、私たちが如何に深い感謝を我等の主に捧げたか、誰がそれをいい表わせましょう。間もなく彼等は私たちを殺すでしょう。こうして、この奉行は教館へ入って来て、日本人説教者レオン、パウロ、ベントウーラ、トメー、ガブリエールを捕え、彼等を連れて行って、今彼「奉行」の手許に置いています。日本人説教者たちはその「連れて行かれる」途中で異教徒に、偉大な勇氣と力を以って説教をし続けました。やがて彼等は牢獄から私の許へ一通の手紙を書いて寄来し、「私たちがキリシタンであるという理由で首を斬られるのは必定です。しかし私たちは他の数々の苦しみを受けることに深い喜びを感じ、また満足しています。そして私たちは「天国のための」僕として生活して来たその天国へ行つてあの榮譽を受けるという大きな期待をすでに抱いています。主の愛のために受難できる堅固な意思を私たちに与え賜うよう我等の主に代禱して下さい」といつて来ました。私は彼等に、「あなた方が天主のために受難したいと望んでいるその天主は、この名譽ある戦いにおいてあなた方を援助して下さい」と答えました。さて後に残された私たちは、都の奉行が私たちを連れずに去ってしまったのを見て、これまで抱いていた喜びが総て悲しみに変わってしまった。何故なら奉行は私たちを悉く連行することと考え、そのつもりで色々な準備を整えていたのに、私たちはその深い罪のために、この偉大な祝福を受けるだけの価値のないことが解ったからです。^{〔註1〕}しかし私たちは私たちの願望が満たされるといふこの大きな御恵みを主が与え賜うであろうとの信頼を未だ棄ててはいません。何故なら私たちは今なお囚えられて監視をつけられ、すでに私たちの天主堂へはキリシタンを入れさせないようにしてあるし、監視も異

教徒も夥しい数で、教館から外へは一通の手紙も送れないほどであるからです。どうか私たちとその他全キリシタンのために主に代禱して下さい。私たちもここで台下のために代禱致します。今や私たちが使徒としての役目を始めるときのように思われますし、また主は私たちをこうした一切の不安と労苦の中に見棄て給うことはありません。ですから強い勇気をもち、台下の主を信頼して下さい。何故なら主の聖なる慰めの数々は常に私たちの霊の中に生きていて、主の愛のために数多の苦しみや侮辱を受けようとする努力と勇気を私たちに与えて下さるからです。一切の労苦において私たちを慰め給う我等の主イエズスに祝福あれ。私たちは数多の喜びをもっています。何故ならイエズスの御名のために侮辱を受ける資格のあることが解ったからです。そして主が私たちに、主の愛のために喜んで受難するこの祝福を施して下さい。もう手紙を書く時がありません。天主の御心の台下に上にあらんことを。

これはあの使徒の如き立派な思慮深い牧者の書簡である。この中で聖遣外管区長は事件の報告をしているのみならず、真に「彼自らが」聖霊の聖堂^{ゴゴブ}であることを示している。何故ならば、彼自身やこの力強い隊長の下で受難する勇気と努力を身につけたその他のキリシタンのことをあれほどの熱誠を以って述べているからである。また主がその長くて自由な御手を以って天の慰めを彼等に知らせ給うことにより、「彼等の受難に対する」力は偉大なものであったと述べている。彼は事件の概要を述べているのみであるが、そのとき彼と共に居て宣教師ではないという理由で釈放されたスペイン人から私は聞いて次のことを知った。監視人の目を盗んでは動くこともできないほど見張りが執拗であったし、日本人説教者たちが捕えられて牢獄へ連れて行かれるときに、聖遣外管区長も日本服を着用していたために引き立てられた。そして（すでに述べたように尊敬すべき思慮のある老人である）兄^{エムマノエル}弟^{コスマ}は聖遣外管区長が引き立てられて行くのを見て、日本服を着用してはいたが彼「引き立てられて行く人」が聖遣外管区長であることを

認めて、彼の許に走り寄つて強い愛情で彼を抱擁し、そのような不名誉を以つて牢獄へ行くのを見て彼のために悲しんだ。役人^{フレイヤー}の手^{ミスト}下はこれを見ると、その善良な老人に強烈な平手打ちを加えたので、老人は地面に倒れた。彼是我等の主イエズスの御為に死ぬ充分な心構えが出来ていた人々の一人であつたので、非常に満足して地面に接吻し、役人に自分の受けた屈辱を感謝した。聖フライ・フェリーペはこの時すでに聖遣外管区長と共に彼方〔都に〕居た。

聖フライ・フェリーペは船^{ナビー}から来たときには聖フライ・マルティーンと共に大坂に残つていたのであるが、当時起つてゐた事件に関する種々の問題を処理するため都へ来て、監視がつけられたときには聖遣外管区長やその他の兄弟たちと一緒に居た。彼等には聖殉教者たちの身に起こるべき栄光の最後が解らなかつた。それで諸種の問題に必要なために聖フェリーペが〔囚われから〕出られるように努力されたが、不可能だつた。こうして主はこの僕が殉教という榮譽を受けるように計らい給うた。それと殆んど同時に聖フライ・マルティーンにも監視が付されたが、彼は大坂のベレン修道院にいた。殺されることは確実であつたが、主の御為に受難しようという勇氣も希望も彼に欠けることはなかつた。何故なら数名のキリシタンが聖具室の裝飾品を取り出すために入つて来た窓から彼は逃れることが出来るにもかかわらず、イエズスの真の勇敢な兵士として、逃亡によつて信仰を汚すことを希望しなかつたからである。いやむしろ聖フライ・マルティーンはすでにイエズスの堅固さで身を固めていたので、主の栄光と自分の説いてきた信仰の真実のために殉教するのを望み、その事件の結末を喜んで待った。主は囚えられてただ独りである聖フライ・マルティーンを、パードレ・フライ・ジェロニモ・デ・ジェズスの到着によつて慰め給うた。彼〔ジェズス〕はその修道院^{アルシエンテ}の長となるために長崎からやつて来たが、聖フライ・マルティーンの〔囚えられている〕状況を見て何回も手紙を送つて彼を慰めた。しかし彼〔ジェズス〕は直ぐには聖フライ・マルティーンの許へ行つてその伴侶となることはせずに（後に述べるように）、到着したことを聖遣外管区長に知らせたその命令を待った。聖遣外管

区長はジェロニモ・デ・ジェズースに、「今後最初に起こる機会（将来も多数の殉教者が出るものと思われるから）にキリシタンを指揮し、台下の死と模範によって彼等の信仰を固めさせるように、今は身を隠されよ」と命じた。しかしこの主の僕はただ独りで居たし、神の子（あの貧しい教館はその神の子に捧げられていた）の御降誕の祝日になったので、ジェロニモ・デ・ジェズースはイエズスの御為に囚われの身となっている兄弟と共に御降誕のお祝いをするとして、一人のキリシタンの援けを借りて教館の内へ入ることができた。このことは二人にとって少なからぬ精神的慰めであった。何故ならば二人は互いに告解し合い、各々ミサを三回唱じ、その日は一緒に居て互いに主によって心を慰め合ったからである。一人「聖フライ・マルティーン」は囚われの身にあって享ける喜びを語り、他方「ジェロニモ・デ・ジェズース」は「台下と殉教を共にするという希望が果たされるまでは台下に対する聖い羨望を抱き続けます」と述べた。そして従順（の誓い）を守るためにパードレ・フライ・ジェロニモは修道院から或るキリシタンの家へ行つてそこに身を隠した。聖フライ・マルティーンは兄弟から別れて悲しみを受けたが、主は思いがけない喜びを与えて彼を慰め給うた。それは次のような事情である。船サン・フェリーペの司令官が数名のスペイン人とサン・アグステイン会の一パードレ及び聖殉教者たちの伴侶であつて同じ船で「日本へ」行った兄弟フライ・フアン・ポーブレと共にその「大坂」市にいた。彼等は天主堂と聖フライ・マルティーンを訪ねようとしたが、異教徒たちが彼等を入れさせなかった。しかし彼等が全く考えなかったときに、その同じ日の午後そこに入つてもよいという許可を得たのである。彼等はマニラで用いられている暦（註・a）を用いていたのであるが、それによるとその翌日が御降誕の祝日であつた。（というのは日本においては一日前に数えられていたから）。聖フライ・マルティーンが囚えられて苦難に遭遇しているのを深く悲しむと共に、我等の主イエズスのために受難する彼の偉大な堅固さと希望を見て大いに慰められた後、彼等は自分たちの暦に従つてその聖なる日を祝うことに決めた。そのために全員悉く告解を

し夜半に起きて朝マイケイキス課とガーリヨのミサ〔註・御降誕の祝日深夜のミサ〕を唱じた。そのときの彼等の精神的喜びと御降誕のビリヤンシーコ〔註・クリスマス・キャロル〕の喜びは実に大きなものであったので、執拗に懇願して「天主堂に」入ることのできた少数の日本人キリシタンには深い信心と信仰の堅固さを与え、監視役の異教徒たちはこれほどの労苦を味わっている人々にこのような大きな喜びのあることを知って感謝の念を惹き起こした。スペイン人たちは深い信心を抱いて御聖体を受領し、また日本人の或る者はスペイン人があの質素な聖堂チンブロでお祝いをしていたときに優雅な声を聞いたと確証した。ミサが済んでから人々はみな、キリシタンが聖フライ・マルティーンへの深い愛情から作った粗末な食事を取ったが、多数の人々が自分たちの受けた信仰のために捕えられて彼と殉教を共にすることを望んでいた。

その同じ日にスペイン人たちは、聖フライ・マルティーンへの深い愛情に因って、また囚えられたままの彼と別れる悲しみのため修道院に心を残して去って行った。特にエルマーノ・フライ・ファン・ポーブレにとっては、スペイン人たち〔の問題〕を適切に処理するため一緒に去らなければならないので、その悲しみは口にはいい難いものであった。そして彼〔ファン・ポーブレ〕が聖服アビトを着て街へ出て行ったのに、これに侮辱を加える者が誰一人として居なかったことは銘記に値することであった。また彼が大坂に居ることがわかつていたのに、捕えようと威嚇されることは全くなかった。バードレ・フライ・ジェロニモ・デ・ジェズスもスペイン人たちと一緒にいたが、彼等は聖遺外管区長から数回にわたって書簡を受け取った。彼はその中で彼等を慰め、修道士に為すべきことを命じ、またかの地〔都〕で起こっている事態、囚われの身で抱えている精神上の慰め及びキリシタンがイエズスのために彼等の精神上の父親や信仰における師と共に殉教したいと表明して示している努力などを知らせて来た。

註 1 フライ・ファン・デ・サンタ・マリーアは一六〇一年スペイン刊行の「殉教に関する報告……」の中の第五章七三葉で

次のように述べている。この時期に日本に居たフランシスコ会修道士は十一人で、都〔註・原文は「Macao」〕と大坂に居た六人のみが問題になった。これらの人々は囚えられたが、長崎に居た他の四人はそのままにされた、その四人の名はフライ・アグステイン・ロドリゲス、フライ・マルセロ・デ・リバデネイラ、フライ・バルトロメ・ルイス及びフライ・ジェロニモ・デ・ジェズスである。〔註・他の一名はフライ・フアン・ポーブレ・デ・サモラ〕。

a 西回りで東洋へ来ているスペイン人と東回りで東洋へ来ているポルトガル人の間ではその暦に一日の差がある。

第三章 祝福の諸殉教者が捕縛され、我等の主イエズスのため生命を捧げるのを待っているときに抱いていた喜び。

何時彼等に監視が付されたか——御降誕の御祝い——立派な教長の日課——聖遣外管区長の勇氣。

栄光の諸殉教者の手紙によつて知られるように、監視は十二月九日に付けられた。そして監視は殉教者たちが同月末に公儀の牢獄へ連れて行かれるまでつけられていた。〔殉教者たちは〕修道院に囚えられたまま我等の主・イエズスの聖なる御降誕のお祝いをした。監視たちに妨害されたし聖殉教者には殆んど自由が与えられなかったので、その前の数年のように朝課・ミサ或いはその他の晩課の祈り・終課にキリシタンを集めて精神上の喜びと聖なる歌とともに習わしの如く厳肅にその祝日をお祝いすることは困難であつたが、しかし天の嬰兒イエズスに対する信心は彼〔イエズス〕の御為に苦しむにつれて増していったので、自由が束縛されればされるほど、キリシタンの信心は深いものとなった。というのは彼等はその夜、死という恐怖をも考えず生き生きした信仰を特別に表わして、彼等の主の御

降誕をお祝いするために天主堂へ赴いたのである。それは聖遣外管区長が、聖フライ・マルティーンや（述べた如く）そのとき大坂に居た他の諸修道士に送った次の手紙の中に記しているとおりである。

聖遣外管区長の書簡

『イエズスの平安、台下の手紙及び兄弟フライ・ジェロニモとフライ・フアンの手紙を受け取りました。パードレ・フライ・ディエゴ・デ・ゲバエラ及びそれらの人が悉くそちらに留まっていて、それが台下にとって精神上の慰めとなっているのを知り喜んでいます。もし私がこの御降誕の祝日に彼等を客として迎えて、私たちの貧しさと大きな愛と意思で彼等に奉仕し喜ばせることができたなら非常に幸わせに思うでしょう。私たちは体を囚えられてはいませんが、「役人は」私たちの霊を捕えることは出来ないのですから。私たちはこのようにして天主の栄光「のため」大きな精神上の喜びを感じながら、神の御子の聖なる御降誕をお祝いしました。私たちは声を合わせて晩課を唱じ、「あたり一体に」香がたちこめていました。キリシタンには天主堂の中庭に入る許可のみ与えられたので、彼等は氷がはるほど寒いのにそこで晩課や朝課やガリーヨのミサ〔註・御降誕の祝日深夜のミサ〕を最大の栄光として聴きました。多数のキリシタンがやって来しました。私たちは声を合わせて招詞〔註・朝課の初めの詩篇九四〕・聖歌・読誦及びミサを唱じましたが、キリシタンは酷しい寒さに震えながら讃歌やその他一切のことを聴いていました。キリシタンが求めたので、夜明けのミサも行なわれ、私たちは一つの祭壇に貧しい推帶用祭壇を奉じました。そして私たち「スペイン」風の歌を歌いました。私は昨日ある噂を聞きました。これはコスメの家から出たものと信じていますが、浦戸にもう一隻の船が現われたという報告が太閤様の許に届いたので、太閤様は非常に喜んで長曾我部を彼の地に派遣したというのです。もしこれが真実であるとしたら、私はその船もまた呂宋から来たものか否かが判明するまでそ

れらの人々「スペイン人」に關する処理が延ばされるに違いないし、またそう「船が呂宋から来たもの」であるなら、船の人々が日本と戦争をしにやって来たのだと誤信されるに違いない、ということを恐れています。主よ、助け給え、真実のことが判明すればよいのですが、これはマニラにとつてはあまりにも大きな不幸ですから。司令官の求めていることでありますから、兄弟フライ・ジェロニモは長崎へ行つてもよいのです。しかし国王の処理が済むまで出発を延ばした方がよいと思われます。しかしまだすぐ行こうと考えているなら、台下の上に主と私の祝福のあらんことを。そしてもし私たちが最初に十字架にかけられるのでなかったら、今後起こる事実を私が知らせるまでそこに留まっていた下さい。何故ならこれは主の愛のために私の望んでいることですから。

エルマーノ・フライ・フェリーペは司令官と共に行くことを希望していますが、彼がその船で来た一人であることを見て長曾我部と交渉しなければ行くことは不可能です。これらの事件がどういう結末になるか解るまで私たちがここにいますから現在のところ私たちだけで充分です。それで兄弟フライ・ファンも私たちの兄弟・管区長にここで起こっていることを報告するためにマニラへ戻られよ。私達が悉く殺されることが解つたら、私は彼を行かないように引き留めます。「日本の役人が」私たちを殺さないと確定しているわけではありませんが、私は私たちがその御恵みに浴することができるとは信じていません。兄弟フライ・ファンが手紙で述べている次の意見は非常に立派なものです。「キシタンが殺されるとしたら私たちが去つてしまふのはよくないと思います。即ちキシタンは殺されて私たちが釈放される場合は、彼等に説教し且つ力づけるために私たちも彼等とともに行くべきです。もし私たちを殺さないとすれば、私たちをこの王国から追放するに違いありません。」主は最もその栄光となるように計らい給うであります。だから私は囚われの身であっても、死から救い給うように主に求めたことはなく、我が身を最も天主の御心に叶うように為し給え、と願つて来たことは確かです。そして私はこの御恵みに限りない感謝を捧げていま

す。「役人は」病院の憐れな人々をも外出させません。こうした監禁状態が続いたら彼等は何を食べて生きてゆけるか解りません。彼等は私たちに与えられたものの内から施しを求めています。主に祝福あれ、キリシタンはこの監禁に際して以前よりよく施物をしに来てくれています。私はただ彼等「癩患者」と共に食べるほど充分な米のない事のみを心を痛めています。一人一人に宛てて書く時間がありませんので、この手紙は三人に宛てたものと考えて下さい。私たちのため主に代禱して下さい。私たちもこちらで皆のため特に熱心に代禱致しますし、船の人々全員のため毎日連禱^{レタニヤ}を唱じています。主の御心の台下方の上にあらんことを、云々。』

この手紙から、主の僕が殉教を望んで満足と喜びを抱いていたことは、彼等があれほどの精神上の喜びをもって神の御子の聖降誕をお祝いしたことから推測されるが、そのみならず、「牧者の手を離れて」散在している羊の群に適切な処置を計らうこの聖教長の勇氣と思慮もよく看取することができる。こういうわけで、栄光の教皇・聖シルベリーオ〔註・教皇在位五三六―五三七七年〕がアマートに宛てた手紙の中で彼自身について、

Sustentor pane tribulationis et aqua angustiae, nec tamen dimisi aut dimitti officium meum.

即ち「私は諸々の苦難を日々の御馳走と思い、諸々の苦悶を飲み物と思っているが、自分の務めを放棄しなかったしまた今後もし放棄しないであろう」といつていることがこの聖人についてもいえよう。人間にとって死を待つのは死ぬことよりも大きな苦痛である。だから祝福された聖殉教者にあっても、精神の準備はできているとしても肉体は薄弱なものであるから、恐怖と驚愕に満ちているに違ひなく、それで精神が望んでおり、肉体が恐れているもの〔死に關する記憶でもって現世の一时的な御馳走を苦いものとしていた、ということとはよく了解できる。しかし総ては天国へ行くための貯えであって、主の愛のため受けたあらゆる事に対する報償を天国の中に見出すであろう。主の特別な

御摂理によつて、栄光の殉教者たちは、異教徒からスパイであるとか或いは（実際には貧しいことが示されていたのであるが）船サン・フェリーベの積荷の半分は彼等（修道士）のものであるとかいつて非難されたが、彼等に対して与えられた宣告にはこの事は一切書かれずに、「国王の意思に反して聖福音を説いたかどで十字架の刑に処す」と書かれる結果になった。主はこの事の中に、その教会がこの「殉教の血の」灌漑によつて信仰上の一層強固な土台を打ち建てるため、福音の教えが異教徒の手を通じて殉教者たちの血をもつて堅固なものになるよう希望することを示し給うたのである。

第四章 聖殉教者たちは如何にして捕えられ、公儀の牢獄へ連れて行かれたか。

何時に聖殉教者たちは捕えられたか——聖殉教者たちは異教徒を快く迎えた——聖フライ・ゴンサローに加えた異教徒の残酷な仕打——二人の殉教者の喜び——筆舌に表わせない従順——クリシタンの悲しみ——立派なクリシタン・マリーア——賞讃すべき事柄——精神的な慰め。

聖殉教者たちには監視が付せられていたが、十二月三十日に異教徒の役人が聖殉教者たちを公儀の牢獄へ連行するため、武器をもつた手下を率いて天主堂に乗り込んで来た。「捕手の」もっている武器の交錯の音で、病院にいた人々は彼等が何のためにやってきたのか了解した。クリシタンは聖人たちの勧告によつてすでに心の準備ができていたので、彼等のうち誰一人として、彼等の精神上的の父親たちと共にイエズスの御為に受難するのを望む勇氣に欠けていた者はなかった。こうして子供も大人も男も女もみな異教徒の後を追つて行き、彼等と共に天主堂へ入った。そのと

き祝福された殉教者たちは晩課^{レクサス}を唱じていたが、異教徒の立ち騒ぐ音で彼等が何のためにやって来たかを知ったとき、殉教という嬉しい希望が殉教者たちの許に再び特別な喜びを携えて戻ったのである。祝福の殉教者たちは主に感謝を捧げ始め、互に抱き合つて、彼等の待ち望んでいた計り知れない幸福を祝った。彼等は受難するという期待で、「人間が」生来有する恐怖を克服して自らを大いに力づけた。極めて尊敬すべき聖遣外管区長は合唱所に掛けてあつた少し大きい十字架上のイエズスの像を取り、大きい愛を以つて像の足に接吻し深い信心を抱いてそれを頸にかけた。そしてすぐに聖殉教者たちは聖遣外管区長を勇敢な隊長として、挫けることのない勇氣を抱き、一団となつて天主堂へ降りて行つた。そこには彼等を捕えに來た「役人」が待ち構えていた。

聖フライ・ゴンサローは（その生涯（の伝記）において後に述べられるように）合唱所には居ないで、畑の中にあつた大きな十字架を抱擁しに行つていた。天主堂に着くと聖遣外管区長は扉を開けるように命じ顔に喜びの色を表わして待つてゐると、異教徒は怒り狂つたような勢いで祝福の殉教者たちに非道な仕打を加え始めた。携えて來た紐繩で殉教者を手荒く後手に縛り頸に繩を掛けた。激しい寒さのため殉教者たちが着用してゐた質素な短いマントはこのこと（彼等を縛る）のに妨げにはならなかつたので、剥ぎ取ろうとはしなかつた。このとき聖殉教者たちの忍耐と歓喜、異教徒の殘虐及びキリシタンの悲しみと波が競つてその場に満ちてゐたが、これは全く記録に値することであつた。異教徒は修道士が一人足りないのに気付いたので、その修道士を探しに憤然として修道院の中へ入つて行つたが、彼等は聖フライ・ゴンサローが畑の中で十字架を抱いてゐるのを見て彼を捕え、棒で何回も殴打しながら天主堂へ連れて行つた。そうしてゐる間に、他の異教徒は祭壇の像を取りはずしたり、聖具室にあるものを取つたりしてゐた。しかし教館内にあるものは悉く登録されてゐたので、誰もそれらの品の一つをも取れて盗もうとはしなかつた。祝福の殉教者たちは縛られた後、主祭壇の前に跪づいて「主を讃えよ」と唱じ始め、殉教がこのように立派に始め

られたことに對する喜びを表明し、天主堂の捧げられている聖母マリーアと榮光のバードレ聖フランチェスコに記念
禱を捧げる機会を異教徒から与えられた。それが済むと獄卒は殉教者たちを捕え、格子戸を出るとき頸に十字架上の
イエズスの像を掛けていた祝福の遣外管区長を嘲弄するため、一人の異教徒が格子戸の上に吊してあつた十字架をも
ぎ取つた。そして祝福の殉教者たちの前に来て、「お前たちは十字架にかけられた者を崇拜するのだから十字架の同
類だ。だから私はお前たちの前に十字架を立てて行つてやらう」といった。彼等と共にルイスとアントーニオとい
う二人の少年をも縛つて連れて行つたが、この二人は熱心に願つた結果、殉教の恵みを多分受け得るだらうといふこ
となつた。彼等「殉教者たち」が天主堂の中央に着いたとき、キリシタンが「殉教、殉教」といつて切々たる叫び声
をあげ涙を流したので、修道士は「私たちが居なくなつたとき、信徒は主の特別な保護を受けるであらう」と考えて
その悲しみを抑えたが、もしそうしなかつたならば、その受けた悲しみは他人には信じ難いほど大きなものであつた
らう。何故なら修道士は信者たちをイエズスの子として愛していたのであるから、その愛は他の人には解らないほど
深いものであつたからである。しかしこの事やキリシタンが自分たちの父親に對するが如くに殉教者に近づくので異
教徒がキリシタンを棒や拳で毆つて残酷な仕打を加えるのを目にして、殉教者たちは大きな苦しみを受けたのである
が、それによつて殉教の榮光は慈愛の焰で燃えた臟腑から生じる父親としての悲しみと共に増していった。それで聖
殉教者たちは歌いながら行き、キリシタンはそれに和するように応じ、自分たちが見放されて孤独の身になるのを悲
しみ、それについて涙ぐましい歎きを主に訴えた。キリシタンは悲しみと愛とに引かれて修道士から離れることがで
きず、必ず天国で再会できるのが解つていても今彼等を失いたくないと考へた。

キリシタンの頑強さは、飽くことなく彼等を棒で打つたり残酷な仕打を加えたりする異教徒の殘虐さに打ち勝つ
た。幸運の殉教者たちは入口から出て行くときに聖母マリーアに捧げられた聖堂に別れを告げるのであるから、「榮

光の主」の讚美歌を唱し、聖アーナの病院を通るとき、この栄光の聖女の記念禱を声高く唱しながら祈った。憐れな「癩患者たち」は彼等にとつては天から贈られた母である師が捕えられ、連れて行かれるのを見て師のために泣き、またあらゆる幸福や贈物に見放されてしまったように感じて大きな悲しみの叫び声をあげたので、その叫び声を聞いた聖人たちの悲しみや苦しみも彼等「癩患者」に劣ることはなかった。聖人たちは彼等を日本の宝と為して心の中に抱いていたので、聖人たちにとっては彼等と別れるのが他人には理解できないほど悲しいことであつた。キリシタンは聖人たちについて行こうとしてきかず、聖人たちのマントを引張つて聖服に接吻し、聖人の足に接吻するためにその足下に身を投げ出した。またそれができない時には聖人たちの踏んだ地面に接吻をした。聖殉教者に対して抱いている愛を最も強く示したのはマリーアであつた。彼女は兄弟コスメ（彼については已に述べた）と結婚した身分のある婦人で且つ「第三」会の女子会員エルミナであり、終始修道士に対して母親としての仕事をしてきた者である。イエズスの御名においてかくも深く愛していた聖殉教者たちが自分から奪われていくのであつたから、獄卒が彼女を如何にひどく殴打しても殉教者の足から彼女を引き離すことはできなかった。彼女は殉教者の足にすがつて、「縛られて連れて行かれる人々は聖人で罪はないのです」といった。彼女はむりやりに家へ連れて行かれて、そこで罰を受ける者の如く監視を付された。この出来事の中に見られることは、栄光の殉教者が囚えられたことによって、殉教者のみならず殉教者に深く同情しイエズスの御為に彼等と共に死ぬのを望んで彼等について行つた信者たちにも多大の労苦の積まれることを主が欲し給うたことである。天主堂の附近に住んでいた人々もイエズスの御為に「財産を」奪われる（という苦しみに遭つた）、何故ならば彼等には着るべき貧しい衣類が一枚残されたのみであつたからである。

聖殉教者たちは天主堂から牢獄まで四分の一レーグア以上ある道を連れて行かれたが、途中その市の主要な街路で大混乱を「惹き起こした」。修道士はいつも子供や思慮のない人々から罵声をあびせられたり泥や石を投げつけられ

ていたのだが、同じ聖修道士が縛られて牢へ引き立てられて行く途中、公の街路を通るとき、異教徒が彼等に常々のような侮辱を加えず、かえって悲しみを示し且つ異国のパードレであり何の罪も犯さないのかかわらず不面目にも牢へ連れて行かれるのに驚いていたことは感歎すべきであつた。修道士は道々会う人々に主の教えを説き、この不名誉が彼等にとっては如何に名誉であり光榮であるかということを通して顔色や言葉に表わしながら、深く満足して牢獄に向かつて行つた。さて修道士たちは多数の異教徒に伴われて牢獄に着いた。そして彼等と共に行つたキリシタンや途中で修道士たちに逢つたキリシタンは目にした光景に感動し、恐怖を払いのけパードレたちに近づきその聖服に接吻することによつて自分たちがキリシタンであることを表明した。即ち深い敬意を表わし、はばかりことなくロザリオを取り出し、涙を流しながら同じ教え「を信じている者」であることを示し、さらにキリシタンとして少しも臆せず、言葉に出して自分たちが修道士と共に死にたいと考えていることを表明した。公儀の牢獄に着いたとき、修道士は自分たちが救世主たる天主の御為に受難し悪人と思われるに相應しいということを知つて受けた喜びは説明できないほどであつた。彼等は自分の受難に向かつて踏み出した一步一步に勇氣を加えるため、主の受難を記憶に焼きつけて置いた。そして彼等が牢に入つて、数日前に縛られその同じ牢に連れてこられた彼等の家族である説教師たちに逢つたときの喜びは小さくはなかつた。というのは彼等と一緒に囚われの身となるならば日本人「殉教者」の受ける苦しみが一層快く楽しいものになるであらうから。日本人の喜びと慰めはいい難いほどであつた。それで祝福の修道士が今は自分たちの労苦の伴侶であることを知り、彼等がどんなに大きな名誉に値し、彼等が「日本へ」来たときに国王や重臣たちが如何に大きな名誉を与えたか、彼等が如何に聖く生きて来たかということを考えて彼等の前に跪つき、涙を流して自分たちの心を述べた。そして一同その受け容れた信仰のため、しかもこのように聖なる修道士と共に悪人に囲まれて牢獄に居ることを主の大きな御恵みと考へて獄中で主を祝福した。

第五章 祝福の殉教者の耳の一片が切り取られたこと。

七人の殉教者が引き立てられた——日本の諸貴人が修道士を擁護した——聖殉教者の耳が切られた——敬虔な思慮——誰がそれ等の耳の聖遺物を取ったか。

五人の聖修道士が修道院から公儀の牢獄へ連れて来られてから二日後、今度は聖フライ・マルティーンが彼と一緒にいた三人の日本人と三人のイエズス会の人々と共に大坂から連れて来られた。これらの「イエズス会の人々」は修道士の伴侶フミツトモと思われたので捕えられ都へ連れて来られたのである。そして彼等は後手に縛られ晒物のように人通りの多い街路にある公の場所に晒され、現世の慰めは全くなく、凍りつくような寒さ（その時の気候は嚴寒を極めていた）の下に放置されていた。其処で彼等は通行人に見られ多数の異教徒に愚弄された。異教徒は彼等を悪人と考え、自ら犯した諸々の罪の為にこのような恥ずかしめを受けているのだと思つた。このとき貴人の間では次のことが噂されていた。即ち国王は祝福の諸殉教者を捕えるように命じたばかりでなく、キリシタンに恐怖の念を与えるため彼等を見せしめの刑に処することを希望し、悪人に科せられるのを常としていた耳と鼻を切り取る刑を執行するように命じ、後に殉教者派遣の基地であるマニラへ送り歸すように決定したということであつた。後になってこの決定は実施に至らなかつたといわれている。これは或る重臣が国王に、「外国の修道士で、しかも使節として来た者をそのように虐待するのは褻当とは思われないし、また外国の人々を厚遇するのが日本の習慣である」といった為である。

太閤様はこの言葉に宥められて、囚えられている二十四人悉くの左耳の一部分を切ることに決めた。この決定によつて役人の手下は祝福の殉教者の囚えられている牢獄へ勢いこんで行つた。其処には喜びに満ちた殉教者たちが牢獄

を祈りの家として、そこに囚えられている間は毎日主を讃え、或いは罪のため牢に繋がれていた異教徒に説教するとに努めていた。そして居合わせた総ての人々に謙虚と温和の徳を以って偉大な模範を示し、泣きながら修道士を訪ね或いは食物を持って来るキリシタンを慰めた。聖殉教者は聖なる力で完全に武装され、如何なる苦しみでもそれがたとえ死であっても受ける覚悟が出来ていたので、彼等が耳の一部分を切り取られることになっているということを聞いたときに大きな喜びを感じた。この刑を執行する為に聖フライ・マルティーンは大坂から連れて来られた他の六人の殉教者と共に連れ出され、また祝福の遣外管区長と残りの殉教者たちは後手に縛られたまま牢から引き出されて或る寺院（じやういん）の近くの公開の場所に連れて来られた。そして彼等が耳を切られるという大きな喜びを待っていると、愛するフライ・マルティーンとその前夜彼と共に大坂から連れて来られた至福の日本人たちが役人の手下や大群集と共に他の街路から来るのが見えた。福音の栄光のため自分の血と生命を天主に捧げるといふ恵まれた機会に互いに相会したとき、そしてかねてから抱いていたイエズスの為に受難するという望みがすでに達せられ始めたのを目にしたとき、彼等が如何に大きな喜びを受けたか、それを誰が説明できるであらうか。

さてこの公開の場所へ着くと「役人が」殉教者の耳を切り始めた。殉教者は互いに聖い言葉によって励まし合い、この刑を受け終えた修道士たちはその際殆んど痛みを感じなかったこと及び信仰の入口であった耳がそれ「信仰」の真実を表明し、流れ出た血は数多くの言葉が説く以上に効果のある声であるのを知って霊が如何に大きな喜びを感じたかということを証明した。祝福の殉教者の悉くについて口ではいい表わせない勇氣が見られ、彼等は更に重い刑を受けるに足る勇氣のあることを示していた。彼等は互いに耳と流れ出た血を見合って、自分たちが血を捧げた主の榮譽を讃えた。そして殉教者たちは傷から生ずる肉体的な痛みを全く忘れ、主の化身のようになった。主は一人一人の心の中に驚くべき力を与え給うた。子供であるから最も弱い筈の者は「却って」最も強くなった。即ち聖少年トメー

が大人のような勇氣を示したとおりである。彼は耳を切る刑が終わると耳を切った異教徒にその耳を示して、「お望みならもつとこの耳を切つて満足の行くだけキリシタンの血をお流し下さい」といった。

受難に對して有する忍耐と希望によつて祝福の殉教者たちは互いに力づけ合い、また彼等を慰め彼等の血を聖遺物として取りに來たキリシタンに教えを説いた。そして祝福の殉教者が爲したこと、述べたことは異教徒にとつて非常に有効な説教であつた。何故ならば聖フライ・ゴンサローが「私たちは誤つた勅言に騙された異教徒たる国王の命令によつて受難し、苦しみを受けているのだ」と説明してきかせると、数多くの人々が心を動かされて改宗したのである。獄中の労苦の際に主は囚えられていた二人の罪人に啓示を与え、主の教えを聞いて聖洗礼を受けるように爲し給うて修道士たちを慰めた。そして彼等は金曜日（金曜日に耳を切る刑を受けたことを見て、嬰兒イエズスが聖割礼の日に流し給うた血の記憶が（主の聖なる愛のため彼等自身の血を流したのは「御割礼の祝日の」一日後のことであるので）生き生きと蘇つてきたとき、彼等の抱いた精神上の喜びは口ではいい難いほどであつた。そしてビクトルというキリシタンは、獄卒が切り取つた修道士たちの耳の片を地面に投げ棄てるのを見るとそれを拾ひ上げ、尊い聖遺物として、またそれを切るように命じた国王から聖人たちの得た勝利の印としてパードレ・オルガンティーノの許へ持つて行つた。

第六章 榮光の殉教者が車に乗せられて引き出され、都の街路を連れて行かれた。

スペイン人たちの労苦——聖殉教者は三つの市の中を連れて行かれた——金曜日に殉教者は耳を切られた——イエズス会の日本人が捕えられた——イエズスの教えの隊長・聖遣管区長。

聖遣外管区長は私たち三人の修道士がポルトガル人の船中に囚えられているのを知つて、榮光の殉教者の殉教の始

めから長崎に着くまでに起こった出来事を道中から書いて送って来たが、それは次のとおりである。

聖遣外管区長の書簡

親愛なる人々よ。私はキリシタンの慰めのために兄弟フライ・ジェロニモを大坂に残しました。彼は身を隠しています。そうしなければ二日と経たないうちに捕えられてしまうからです。エルマーノ・フライ・フアン・ボーブレは船サン・フェリーペでこの国へ来たスペイン人たちと共に残しました。太閤様が彼等をどうか私には解りませんが、彼等はすでに積荷は奪われてしまったのでそれは「積荷」は期待していませんが、自分たちがどうされるのかを待つて大坂に残っています。司令官は王旗と大砲と武器（の引き渡し）を要求しようとしています。私は彼等には何も渡されたいだろうと思います。主よ、彼等の生命のみは助け給わんことを、フライ・フェリーペは私達が捕えられて軍に連れて行かれたとき、私たちと一緒にいました。彼が船サン・フェリーペで来た者であつて私たちと一緒にいたのではないということは二人の役人（フエイク）に知らされていたのですが、彼等は許しませんでした。私たちに与えられた宣告は一枚の板に書かれ、私たちの前に立てられ公に運ばれています。それには「この者共は太閤様の命に逆つてキリシタンの教えを説いたことに因り、長崎に到着したとき磔の刑に処する」と記してあります。それで私たちは主の御恵みによって大きな喜びを感じ、非常に慰められています。何故なら主の教えを説いた理由で生命を失なうのですから。その宣告に載っている私たち、全部で六人の修道士と十八人の日本人が此処まで連れて来られました。或る者は説教者であるが故に、また或る者はキリシタンであるためです。イエズス会からはエルマーノが一人、同寄が一人ともう一人の者が来ています。私たちは悉く牢から引き出され、教台の車に乗せられました。そして前述の者は悉く一人一人耳の一片を切り取られ、このような有様で仰々しい役人の群と槍に囲まれて都の街路を連れて行かれまし

た。私たちは再び牢に連れ戻され、別の日に嚴重に後手に縛られ馬で大坂へ連れて行かれました。そしてまた別の日牢から出され、馬に乗せられてその「大坂」市の街路を連れて行かれ次に堺へ連れて行かれ、その地に於ても前と同じようにされましたが、この三都市の何処に於ても公にふれまわられました。

私たちは直ちに生命を奪われるだろうと考えていましたが、大坂で「牢に」戻ったとき「私たちを長崎へ送るよう」に命令が出ていたのを知りました。皆さん方、主が私たちの生命の犠牲をお喜びになるよう、私たちのために心から代禱をして下さい。キリシタンと兄弟フライ・ジェロニモの慰めとなるよう。あなたの方の中の一人が残られることを希望しています。太閤様が寺沢「広高」に書いた文書には、「呂宋から修道士が来たならば、直ちにこれを殺せ」という命令が書かれていたということです。だから日本の衣服を着ていなければ、ここ「日本」にはいることが出来な いでしょう。私たちのため主に代禱されんことを。そして主があなたの方の悉く或いは誰かに残る勇気を与え給うならば、主の御心に従って最善と考えられる方法によってそれ「日本に留まる」が出来るでしょう。私はあなたの方がポルトガル人の船中にいるのを知りました。主よ、ポルトガル人があなたの方三人に為す善い行ないに報いられんことを。寺沢の弟は私たちに聖体を拝受する機会を与えるよう約束しましたが、誠に有難いことだと思っております。あなた方は私たちに逢いに来ないで下さい。「もし来て下されば」私たちはみな非常に慰められますが、この役人「寺沢の弟」は「あなた方を」私たちに会わせることを敢えて為し得ません。彼は次のようにいっています。「太閤様はもし彼等〔船にいる修道士〕がそこにいることを知って、しかも私〔寺沢の弟〕がそのことを太閤様に知らせないとしたら、私は殺されるだろう。それで太閤様はそのことを知らないのだから、私は船中の修道士に逢わないで、知らぬふりをするのだ」と。次の金曜日には私たちは間違いなく十子架にかけられるのですから、私たちのため熱心に祈って下さるよう、主の愛により皆さん方總ての方々にお願ひ致します。都に於てこの同じ日「金曜日」に耳の一部を切ら

れました。私たちの身に起こったことは総て主の偉大な愛によるものです。親愛なる兄弟たちよ、私たちの死が主の御心に叶うものであるよう祈って、私たちを援助して下さい。今直ぐ行きたいと思っている天国に於て、私たちは感謝致します。これほど遠くにおいても私はあなたの方のことを忘れることはなく、私の心の奥深く抱いていましたし、今も抱いています。あなたの方の上に我等の主イエズスの平安と愛の在らんことを祈ります。親愛なる兄弟たちよ、主と共にあらんことを。これ以上書く機会はありません。では兄弟フライ・アウグスティーン、兄弟フライ・バルトロメ、兄弟フライ・マルセローよ、さようなら。天国に到るまで私のことを心に留められんことを。道中より、云々。

この書簡は聖殉教者が長崎に着くまでにあつた事の実体を述べているのであるが、この事件を明白にするために、この章や以後の章に於てさらに詳しく述べることが必要である。六人の殉教者と共に受難するよう指名されたクリシタンは十八人のみであつた。これは次の理由によるものである、即ち刑の執行を委ねられた都の奉行が、これらの修道士やその日本人フアミリアール伴侶についてののみ迫害が行なわれるのを見て、初めの間イエズス会パードレの教館に付けられていた監視を取り払った。そして名前は載っているが罪のないことが解っている千人以上のクリシタンを殺さないため、聖修道士と共に修道士の著名な弟子として教館から引き出された日本人を殺すのにとどめようと決めたのである。それらの日本人は十五人であつた。また都から半日の行程にある大坂の奉行の命令で、イエズス会パードレの教館にいた一エルマーノと侍祭と他の下男が連れて来られた。それは修道士たちがその市に教館をもっていたので、国王が大坂の奉行を叱責し、クリシタンに監視を付すべしと命じたからである。「大坂の奉行は」判然と修道士のみとは命じなかつたので、その趣旨によつて、一人のパードレが三人の日本人と一緒に住んでいるイエズス会の教館にも

監視が付けられ、その「三人の日本人が」捕えられたのである。後になってそれが誤りであることが解ったので、彼等を釈放すること、即ち贖うことをイエズス会で努力し、都の役人マニヤにその誤りが知らされた。都の役人は「彼等三人」は亡いものと思え」と答えた。そしてそれが主の御心に適っていたことを知り得る。何故ならばその方法によってあの至福の日本人三人に殉教という栄冠を戴かせたからである。その街や近くの村々のキリシタンが祝福の殉教者と共に受難するために牢に集まって来たのを目にした異教徒の役人がこれに感歎して聖遣外管区長に、「何故これほど多数のキリシタンが死ぬのを望んでいるのか」と訊ねたが、これは大いに注目すべきことである。これに対して聖遣外管区長は「彼等は天から与えられる安価な「幸福」及び主の聖い教えの真実のため受難するキリシタンに約束される永遠の至福を享けるために来るのである」と答えた。その答えが異教徒の心に合ったので、「私は説教を聴いてキリシタンになりたい」といった。

耳を切り終わった後、引き回しの為に聖人たちを引き出そうとして車が準備され、それに乗せるとき、キリシタンが公然と「キリシタンであることを」表明する様子を見ると異教徒は「役人が感じたのと」同じように感歎した。これはキリシタンが聖人と共にその恥ずかしめを受けるのを望んで、聖なる頑強さを以ってその抱えている信仰と聖人に対する信心及び聖い羨望を異教徒に示したことによるものである。こうして一つの勇敢なイエズスの騎士の一隊（その勇敢な隊長は至福の遣外管区長であった）が牢を出てから。聖遣外管区長は合唱所から取り出した十字架上のイエズスの像を頸に掛けて旗印として携えて行った。このようにしてそれ「イエズスの像」はあらゆる異教徒に見られキリシタンからは崇拜されたが、「このように頸にかけて行ったのは」手を後に縛られていて手で持てなかったからである。また聖遣外管区長の示した力は他の十字架の戦士たちを励ました。そして聖遣外管区長は先頭の車に乗っていたので、深い思慮により顔を後から来る人々の方に向けて進んで行った。これは最大の不名誉・恥辱に際して表

情の中に示している聖遣外管区長の精神上の喜びを見ることによって、誰一人としてこの秀れた勝利を控えて、勇気を失なわないようにする為であった。聖人たちが洗礼を授けたクリシタンの多くの者は、「聖人たちが」都の長い大通りを引き回されて牢に戻るまで車から離れなかった。そして聖人たちの中に見られた力と聖人たちから聞いた天の言葉によって大きな慰めを受けた。彼等は役人の手下から虐待されたが恥辱とは思わず、祝福の殉教者と同じように信仰を表明して主の愛のために受難することのみを考えた。私たちが船に囚えられていることが彼等「殉教者」に知らされたが、彼等を悲しませないために事実とは異なつて報告された。

第七章 祝福の殉教者の栄光の勝利の際に生じた特別な出来事に関して。

聖人たちの不名誉の名誉——異教徒の悲しみ——注目すべきこと——聖人たちの喜び——刑の宣告文を前に掲げて行つた。

前述の不名誉に関してその方法や重大さ（というのは日本に於ては耳を切る刑も、晒し者として車で街路を引き回されることも極めて大きな不名誉であつたから）を注意深く考察すると、初期の教会の諸聖殉教者の受けた恥辱の数々が今ここに再現されるように思われる。即ちローマの諸皇帝の赫々たる勝利は永遠の忘却の中に葬り去られているのに、イエズスの御為に受けた諸々の恥辱や不名誉は天国の戦いの教会及び勝利の教会に於て、永久に祝福されるべきものであり、天使の合唱隊は汚れなき小羊・我等の主イエズスのために喜んで不名誉を受けた聖人たちに讃歌を歌うのである。然してこの真実性は一点疑う余地がないのであるから、主のため不名誉と恥辱を受けることは現地の与

える名誉よりは遙かに秀れた名誉である、という事実は極めて確かで真実である。だから日本人キリシタンが熱烈な信心と精神をもって聖殉教者について行き、主の教えを示されたときにその真実を知り、あたかも彼等が凱旋して栄光の下に歩を進めるかのように考えて聖人たちと共に恥辱を受けることを望み、聖人たちの車に乗り込もうとした。キリシタンのみならず、これと同様のことを名状し難い恥辱であると常に考えていた異教徒も、栄光の殉教者の罪のない生活を知ると、彼等が無法な仕打を受けていると言明し、外国人であり、貧しくて慈悲深い修道士であると考えていた聖殉教者たちに対する同情を涙と特別な悲しみを以って示し、彼等「異教徒」の間で、アカーヤ〔註・ギリシヤの一地方〕の住民が聖アンドレースについていった言葉即ち「罪がないのに刑を宣告された」という噂をしていた。殉教者が通るときに異教徒の婦人が窓や戸口に姿を現わした。彼女等はそういう場合いつも目にしたことを嘲笑するのであるが、このときは嘲笑するためではなく、その悲しい光景に心を打たれ、国王から尊敬され重んぜられていると思われるいた聖人たちの身にこの奇異な事態が生じたのを見て同情と感謝の念を示したのである。そして異教徒やキリシタンがさらに感謝したのは、祝福の殉教者たちが都の最も主要な大通りを通ることになっているのが知れるとおよそ異教徒という異教徒が何の命令を受けたでもないのに、少なからぬ苦勞をして多量の砂を運びそれを大通りに撤いたことである。日本でこういう儀礼が為されるのは、種々の色彩とそれぞれの標章で装って各自の威厳と地位の偉大さを表示したあらゆる重臣を国王が引き連れ勝利の車に乗って威風堂々と市に入る時のみであるが、こういう事は年に一・二回しかない。また日本人は死刑のため誰かが引き出されたとき、それが身分の高い者の場合でも砂で街路を清めたり飾ったりしないことを自ら知っているから、「今回砂の撤かれたことに驚いたのである」。異教徒には解らないのであるが、「砂の撤かれたのは」主が如何にしたら主の僕たちが榮譽を受け、彼等の無罪と彼等の受けている不当な扱いが明らかになるかを考え給うたからである。

祝福の殉教者は後手に縛られ三人ずつ車に乗せられて、イエズスの教えを説きながら行つた。殉教者たちはこの不面目から受ける満足の心を喜びの顔に表わしていた。一枚の板に書かれた宣告文は一人の異教徒が槍の上に掲げて聖人たちの先頭に持つて行つた。そして今なお清新な耳の血は沈黙の裡に、異教徒のためには主の慈悲を、キリシタンのために不屈の信仰を請う聖人たちの願いの声を主に伝えていた。説教を止めているときには祈りながら行つたが、彼等はイエズスの恥辱を思い浮べることによって深い満足を感じさらに多く受難するように力づけられ、自分たちが愛する主の御為に苦しんでいること、受難できると期待していることに感謝した。こうして（日本の習慣によって、車はそれぞれ一頭の牛によって曳かれていた）最も主要な大通りを連れて行かれたが、裁判官の手下が数多護送していた。彼等は国王が凱旋して市内に入るときに常に為すように、人々を後へ下がらせるため棒によって群衆を制していた。栄光の殉教者たちの「引き回し」が終わると牢獄に戻されたが、其処で主を讃え続け、如何なる出来事、たとえ死であらうと喜んでそれを待つていた。

第八章 殉教に臨んでイエズスの御為に受難したいというキリシタンの表明した強い希望に関して。

キリシタンたる数名の武士の勇氣——主のための受難の力——イエズスの血の効果——ある少女の力強い信仰——地位のあるキリシタンたち——三人の若者の努力。

国王が至福の跣足派修道士を殺すように命じたことが知られてから、主はその公然たる見せしめの不名誉・不面目・労苦及び恥辱的な死に与えられるべき恩賞の徴候を示し始め給うた。それはあらゆるキリシタンが悉く彼等と共

に殉教することを希望するように力づけられ、太閤様がキリシタンに加えた最初の迫害に際して抱いた一切の臆病と恐怖心を捨てたからである。それで教多のキリシタンが生命・名誉或いは現世の一切のものを忘れ去って主とその教えのために殺されようとした希望については長い記録を書くことができる。しかし主の御恵みに感銘して自分たちの立派な希望を表明する為に述べた熱烈な言葉の教々に關しては、ただ私が確実な報告に基づいて知った都と大坂のキリシタンの為したことにについて幾つかを書くにとどめよう。

男らしい勇気を以って自分の意思を表明し殉教を望んだ人々の中に二人の身分の高い若者があるが、彼等は前に述べたようにキリシタンの味方である奉行〔前田〕玄以法印の息子であった。兄はパウロ、弟はコンスタンティーンと称ばれていた。もう一人彼等の従兄弟ミゲールがいたが、彼の信仰と徳については私は日本で度々その噂を耳にした。これら三人の勇敢なイエズスの騎士は（彼等の一人が語ったのであるが）栄光に輝く諸殉教者の生涯について度々聞いたり読んだりしたときに、薄弱で卑しい人間の肉体をもつて歴史が物語るようなあの残酷な責め苦に堪えることは到底不可能であると思った。しかし跣足派修道士のみならず、日本人、しかも救世主イエズスの御名のために投獄され十字架に掛けられようとしている子供たちさえも、あたかもこの世で最も崇高な名誉を待っているように快活に振舞い大きな喜びを示したのを眼のあたりにして、歴史で読んだ事が確かな事実であることを証明し得たのみならず、イエズスの御為に投獄された人々の勇敢な努力によって力づけられた。そして聖パブロや勇敢なコンスタンティーンや力強い聖ミゲールにならって不屈の心の堅固さを示し、国王の愛顧・恩恵によって享けていた名誉や知行を失なうことも心にかけず、また自らの両親を失なうことも、或いはこの理由で自分等の両親や一族が国王から与えられた地位を退けられるのも恐れず、父に向かって「私たちはキリシタンです、キリシタンが間もなく受けるものと思われ、死に際して、如何なることがあろうと私たちは刑を受ける最初の者になるのです。というのはすぐに終わってし

まう現世の一時的な生命を捧げてその代わりに永遠の生命を得るこの良い機会を失なうのは当を得たことではないからです」と申し述べた。この道理によつて彼等の両親の心は柔いだが、母親の涙と父親の「現世の利益を与えるという」約束や脅しとを以つてしても、二年前に私にはかなり臆病に見えた彼等の今のこの堅固な心を動かすことはできなかった。「二年前には臆病であつたといったのは次の理由による」。太閤様の甥・関白「秀次」の宮殿にいたときにミゲールは私の許に近づいて来て私がロザリオにつけてもっている像を見たが、像の中にあるイエズスと聖母の顔を知っていて私に向かつて静かに「イエズスとマリーア」といった。私が「あなたはキリシタンであるか」と訊ねると、彼は静かに、然し恐怖が彼の様子を全く変えてしまつたほどためらつて、「そうです」といった。また私たちは彼の従兄弟コンスタンティノと話をする必要があつた。しかし彼の主君・関白が栄光のフライ・ゴンサロと私に特別な好意を与えてくれているのを彼は知っているのに、私たちは彼と逢うことすらできなかった。そして私たちが強いて求めたのでコンスタンティノは遠慮がちに宮殿の外へ出て、人目を避けた場所で彼がキリシタンであることに疑いを掛けられないようにあちらこちらを見回してから、天使祝詞天使祝詞を唱える位の短い時間のみ、私たちの極く僅かの言葉を聴いた。しかし今このとき、気高い騎士ニコデムスの身に起こつたように、イエズスの血とその僕達の囚われの功德が輝いた。このニコデムスは主の隠れた弟子であつたが、イエズスの死刑が終わつたとき自分が弟子であることを表明し、彼の師の屍をビラートスに要求した。これと同様の結果がこれら三人の勇敢なイエズスの騎士のみならず、他の多数の人々についても見られたが、これは感歎のまゝであつた。

グラーションと称ばれる少女の涙も注目値するものである。主の御恵みによつて彼女はその「信仰上の」望みについて極めて奇蹟的「熱烈」なものになつた。即ちキリシタンの殺されることが公になつたとき、彼女の叔母は殺される心配のない場所に彼女を送ろうとすると、彼女はこの人間的な取り計らいを悲しんで、「私はキリシタンであるの

に、他のキリシタンと共に死なせてくれない」といって泣いた。天の御恵みがこのか弱い乙女の心の中にこれほど力強く表われたので、彼女の受難の願望は極めて熱烈であつた。だから初期の教会に於てダイヤモンドより堅固な心を有し天の御恵みによつて恐るべき苦難を忍んで不信の人々や世間に驚異と感歎の念を起こさせたサンタイネースやその他の勇敢な少女たちと同じ機会に彼女も置かれたならば〔サンタ・イネースその他と同じ受難を〕再現したのである。そしてマリーアと称せられる彼女の叔母は、受難して主の御為に生命を捧げるという真実の意思が固まり、彼女の姪の心の中で光り輝く神の如き堅固さと共に、予想される十字架の刑を二人が清らかに受けるため麻の着物を用意した。

思慮深くて偉大なキリシタン・コスメ・ショーヤがその年老いた生命を十字架の上で終えたいと考えていたその熱望は誰もこれを説明できないであろう。そして彼の誠実な妻であり、立派なキリシタンであるマリーアは祝福の修道士が捕えられ牢獄へ連れて行かれるときに棒で殴られたが、その際すでに霊にとつて棒で打たれ投獄されることが如何に嬉しく有利であるかを経験していた。しかし彼女は自分の家の中に監禁されたので、命を惜しむ者が生命を失なうときに悲しむ以上に、彼女はその機会に生き残ることを泣き悲しんだ。そして彼女の二人の娘イサベルとマダレーナは精神上の親や肉体上の両親の模範に動かされて聖なる羨望から、洗礼を受けることになっている人々の一員に加わりたいと望んだ。

他の新旧数多のキリシタンも〔右に述べた人々と〕同じ精神と願望を抱いていた。彼等は修道士たちの示した信仰の手法を眼にして、受難することを望んで信仰に榮譽を加えた。しかし私はこれに感歎はしない、というのは私は聖福音を説く巧みな弁舌によつて一名キケロと称ばれていたイエズス会の兄弟ビセンテの徳を知っていたし、信仰のため名譽も財産も失ない、その〔信仰を〕真実のものと認められた勇敢な信仰の隊長ジュスト・右近殿の堅固な心を幾

度かの機会に見ていたからである。また私はイエズスの信仰を棄てないという理由で財産や知行を奪われたアンドレ・ス・小笠原の偉大な信心と古くからの信仰を経験して、いたし彼がイエズス会の諸パードレの大坂に有する教館の表側の部屋に住むという堅固な心・勇気を見たからである。小笠原はこの方法「教館の表側に住むこと」によって近所の異教徒をだまし、イエズス会のパードレがそこにいることを悟られないようにし、もし必要ならば生命を捧げて主に奉仕することを少しも躊躇しなかった。このようにしてキリシタンが世間には悟られないようにミサを聴きに、或いは告解をしに入ったり、さらには異教徒も説教を聴いたり教理を教わりに入れるようにしたのである。聖人たちの殉教が洗礼を受けたばかりの彼の年老いた父親や或いは信仰については未だ幼い他の人々の心に、主のために受難したいという偉大な望みを燃え上がらせたことは大きな感謝に値する。

熱心なキリシタンであり、病人の看護人・祝福の殉教者パウロ・鈴木兄弟であるサンチョに関して信頼できる人々から聞いたのであるが、彼は仕えていた異教徒の武士の家へ別れに行つて、彼が信心を捧げている修道士たちと共に死ぬ、といった。そして彼は修道士たちと共に死ぬために、最も臆病な者が死を逃れようとして為す努力より大きな努力を払つた、ということである。

この章を終えるに當つて、長崎で私たちと一緒にいた年のゆかぬ三人の若者（最年長の少年が僅か十八才であつた）について起こつたことを一言述べたい。彼等は私たちが捕えられるのを見ると、誠実な心を示したのみならず自分たちが修道士と共に船に乗せられなかつたので、その中の一人リーノと称ばれる若者は終始囚えられた修道士の後を追つた。彼等と共に船中に入つて彼等に愛と感謝を示しただけでなく、沈黙の中にも修道士に仕えようとする願ひによつて、船の人々悉くに感化を与えた。そしてその翌日、彼等の二人の仲間が船に來た。その二人は料理人として仕えていた信心深い老人と共に残つて教館を守つていたものである。主は（前巻の或る章で述べた如く）主自ら二人

を修道士たちに仕えさせるために選り給うたことを、これら二人の若者の改宗の中に示し給う如く、修道士と共に死にたいという二人の願望は感歎に値するほど特別なものであった。殊にリーノは長崎に両親がいるにもかかわらず、船内に監禁されている私たちと共にマニラ来ようとしたほど堅固な心であった。さらにまたある夜私に、「他日あなた方は十字架にかけられるという噂である」といった。そして彼は私の死が確かであると考えていたので、私は彼に「私たちと共に死ぬつもりであるか」と訊ねた。そのとき私は彼が勇氣に満ちているのを見て、私も大きな力を与えられ、主を讃えるように心を動かされた。

(続く)